

一人前になる日まで

秋田県横手市立平鹿中学校

一年 柿崎 正宗

今年の夏も暑く、僕の町でも連日三十度以上の真夏日が続いた。そんな夏の日差しの中、真っ黒な服で全身を覆い尽くしている人たちがいる…。それはお坊さんだ。

お坊さんは「袈裟」という着物を着ながら、檀家さんに頼まれると、どんなに暑くても外でお経をあげるのである。

そしてこのお盆、僕は初めてお坊さんとして、父のいとこが住職を務めるお寺で、お経をあげる仕事に挑戦することとなった。

以前から「中学生になったら墓行を手伝いに来てほしい」と言われていたのだが、今年ついに中学生となり、デビューを飾ることとなったのだ。もちろん伸ばしている髪の毛はそのままでもいいという条件で…。

とはいつても遊びではないのだから、しっかりとお経は唱えなければならぬ。来るべきデビューに備えて、去年の夏から「舍利礼文」と「普回向」というお経を練習してきた。

一年もかけて練習してきたので、それなりに自信はあったのだが、いざ家族の前にして練習してみると、緊張からか何度かつまってしまふ。

うに違いない。そう思った僕は、何回も何回も家族の前で練習した。時には家にあるおじいちゃんの仏壇の前に、親戚に囲まれながらお経をあげる「特訓」も行った。そうしてどうにかこうにか、本番までに仕上げる事ができた。

そして迎えたお盆当日。僕は一日で一番暑い真っ昼間にお寺に向かった。お寺に着くとさっそく例の袈裟を着た。上に羽織る黒い着物は意外と薄くホツとしたが、その下に白い剣道の道着のようなものを着込み、足袋をはき、慣れない草履を履いて外に出ると、あつという間に汗が噴き出してくる。その日の気温は二十八度といくぶん過ごしやすかったにもかかわらずだ。

見ると僕と一緒に手伝いにきた父も、すでにすごい汗をかいている。その父といよいよ初めてのお勤めだ。僕は初めてなので最初は父と一緒にお経をあげる事となっていた。父と一緒にいっても緊張はMAXで、正直その時のことはあまりよく覚えていない。

そしてそれ以降二回目からは自分一人でお経をあげた。しかしそう簡単にいくはずはなかった。「舍利礼文」は三回復唱しなければならぬのだが、何回復唱したかわからなくなった。鐘を鳴らすタイミングを間違えた。突然言葉が浮かばなくなった。ハプニングの連続に、僕の身体から暑さだけが原因とは思えない汗がしとどに落ちてくるのがわかった。

それでもなんとかピンチを切り抜け、いったん待機場所に戻る事になった僕の耳に、副住職さんのお経の声が入ってきた。そのお経は僕とは比べものにならないくらい風格たつぷりで、間のとり方・声の出し方・音量・テンポ・集中力と、ありとあらゆるものが違っていた。「やつぱりプロは違う…」

しかし、悠長に感心したりうちひしがれたりして、いる場合ではなかった。涼しくなる夕方が迫ると、

これからが墓行のピークなのだ。気がつくときまで人はまだまばらだったが、五時半過ぎあたりから墓参に来る人がどっと増えている。そして、それぞれお墓の前で火をたき、ご先祖様をお迎えしている。

「よし、これから勝負だ。」気を取り直して墓行を再開した僕に、暑さに代わる難敵が登場した。それは煙だ。お経をあげているとたいいている火の煙が目に入ってくるのだ。呼吸するたびに喉に入ってきて、お経がつまりそうにもなる。そんなトラブルの連続の中、僕の墓行デビュー戦は幕を閉じた。

一日を終えると、足が棒のようになっていたが、それだけに達成感のある一日だったとも思った。本当のことを言えば、最初は「不安だなあ」とか「早く終わらないかなあ」と思っていた自分もいたのだが、場数をどんどんこなしていくうちに、少しは自信がわいてきて、不安はいつの間にかなくなっていた。僕は今回のこの経験で人間的にずいぶん成長したように感じた。

さらに、このように僕を成長させてくれた親戚や家族にも感謝している。しかし、一番感謝しなければならぬのは、やはり檀家さんだ。今まで見たこともなかった坊主初心者の僕に、お経を唱えてご先祖様を呼ぶという大事なことを任せてくれたのだから。

そんな檀家さんの気持ちに伝えるためにも僕はこれから毎年お寺でお経をあげ、場数をふみ、「一人前だ」と檀家さんに認められるようになりたい。それが僕のこれからの挑戦だ。

ご先祖様と残された家族をつなぐ重要な役割を果たすお坊さんは、日々精進を重ねている。僕も負けずにはられない。

作文を書くに当たって

この作文の中では挑戦することの楽しさ、日本の文化の美しさ、受けついでいく際の努力が伝えたいところです。テーマを決めたきっかけはお寺で、お手伝いをしたことが夏休みの思い出の中で一番印象深かったし、自分が人として、また日本人として成長できた一日だったからです。